

陳 述 書

2020 年 9 月 30 日

井上 ひとみ

瓜本 淳子

1. 初めに

私たちは 1979 年に生まれ、今年で 41 歳になる同い年のレズビアンカップルです。

2011 年から交際が始まり、今年で交際 10 年目になります。

形だけにはなっていますが、2015 年には公の場で結婚式を挙げました。

長くはなりますが、レズビアンである私たちの結婚に対する思いを書かせていただきたいと思います。

2. 結婚式を挙げるまでの私たちのライフストーリー

《ひとみの場合》

【幼少期から思春期】

思い起こせば小学校高学年の頃くらいから女の子が好きなような気もしていました。しかしそれが恋愛感情だったのか、それとも友情の延長上だったのか？と聞かれればはっきりと答えることはできません。

中学校に上がる頃には周りの女の子たちは男性芸能人で誰が好きだとかいう話をするようになっていましたが、私は興味が湧かず話を合わせるために無理やり男性アイドルの名前を挙げたりしていました。

「この気持ちは確実に恋愛感情だ」とはっきりと分かったのは、高校 3 年生の時にクラスメイトの女の子の K さんに対して抱いた思いでした。私は京都の中学・高校・大学一貫校に通っていましたが、獣医師を目指すため大学は外部受験をすることに決めていました。内部進学する K さんと受験生である私とは選択科目も放課後の過ごし方も違うため、どうにかして二人で一緒にいる時間を作りたいと通学の電車の時間を合わせたり、「受験生なのにいいの？」と K さんに言われながら夏休みに遊園地に行こうと誘ったりしていました。

大文字の送り火を見ながらデートをするということに憧れがあり、念願叶って一緒に送り火を見て鴨川を歩いている時には K さんから「ひとみちゃんが男の子だったらよかったの

に」と言われ、『こんなデートのようなことをする相手は女性である私なんかではなく他の男性が良かった』、という意味なのか、『私の性別が男性であれば付き合っていた』という意味なのかと悩みましたが、その真意を聞くことはできませんでした。

バレンタインデーにはKさんに教室の後ろに呼ばれてこっそりとチョコレートをもらったりしたこともありましたが、どういう意味のチョコレートなのかも聞けないまま、それでも一人で浮かれていました。

しかしその頃テレビで同性愛者は「気持ち悪い」「近づいたりしたら襲われる」といったキャラクターで描かれていました。

常に女子二人で行動していた同級生の女の子たちは「あいつらレズやで」といってひどいいじめにあっていました。

当時はインターネットもまだ普及しておらず、自分が同性愛者であると自覚しても、自分と同じように同性を好きになる人が身近にいるとは微塵も思いませんでした。

カミングアウトすれば絶対にいじめにあう、と思い誰にも相談できないままでしたが、大学に合格したらKさんに告白しようと頑張り、2浪の末やっと合格することができました。大学入学後、Kさんに「高校の時から好きだった」と伝えましたが、その時は「そうやったんや、ありがとう」と言われただけでその時は終わりました。しかしその後連絡がだんだんと無くなり、はっきりとは言われなかったけれどこれは拒絶されたんだな、とこの恋の終わりを受け入れざるをえませんでした。

【生きていく上で私の「芯」となった授業】

同性愛については否定的な情報しかありませんでしたが、唯一の救いとなったのが高校3年生の時の授業でした。

キリスト教系の学校だったため、中学では「聖書」、高校では「キリスト教学」という授業が週一回必ずありました。

中学の授業で読んだ聖書には、同性愛は罪だと書かれていました。

私の恋心はテレビの中でも、同級生からも否定され、さらには学校からすらも否定されていましたが、そのことはあえてできるだけ気にしないようにし、Kさんのことが好きで一緒に居たいという一心だけで学校生活と受験勉強を突き進んでいました。

そんな中高校3年の時のキリスト教の授業で、先生が日本の女性アーティストでレズビアンであることを初めてカミングアウトした笹野みちるさんのことを取り上げられました。私は授業で「同性愛」や「レズビアン」という直接的な言葉が出てきたことにびっくり

し、自分のことがばれたりしないかとヒヤヒヤしながら聞いていましたが、牧師でもある先生は「聖書が書かれた時代背景と今とは違う。同性愛を否定する理由を僕は1 クリスマンとして見出さない。」とはっきりと書いてくれました。

後になってから聞くと、これは通常の授業のカリキュラムを越えて行っていたとのことでした。自分がレズビアンであると自覚した時に先生が伝えてくれたことが、自分が今こうして生きていられる大きな力になりました。

しかし、授業の中で意見を求められたクラスメイトが「将来もし自分の娘が同性の恋人を連れてきたら娘とは縁を切る」という発言をしていて、先生から生きる勇気をもらおうと同時に友人からは突き放されるという経験をし、「やっぱり普通はこんな反応をされるよね…。カミングアウトするなんて芸能人でもなければ無理なこと。」と思い知らされました。

【次の恋愛へ】

大学へ入学し大阪に出てきてからは奇特にも私のことを好きだと言ってくれる男性が数人いて、実際に男性と付き合ったことも2度ありました。しかしどうしても友達以上の好きにはなれず、手をつなぐ以上のスキンシップをしたくないと思ってしまい、数か月で別れました。

その後、同じ大学の友人の女の子を好きになり、10年間一緒にルームシェアするものの結局最後まで恋人としては扱ってもらえないままルームシェアは解消しました。就職してから好きになったのは仕事上で知り合ったHさんという女性でした。この方はなんとレズビアンで、私が生まれて初めて出会ったレズビアン（であると分かった人）でした。

私は自分以外の同性愛者に出会えたことに舞い上がり、Hさんといろいろ話をしているうちに自然の成り行きで好意を持ちました。「なんとか私と付き合ってくださいませんか」と文字通り拝み倒して付き合ってもらうことができましたが、私とHさんとの好きの温度差が激しすぎて色々噛み合わず、付き合っている期間は私にとってはすごく忍耐を強いられる辛い時間でした。

【パートナーとの出会い】

Hさんと出会うまでは自分のセクシュアリティを明かしている同性愛者の方と出会える機会が全く無く、相談できるような当事者の知り合いは一人もいませんでした。

自分自身カミングアウトする勇気は持てず、それどころかカミングアウトするというような発想すらもてないような状況でしたので、同性愛者ではない（と思われる）人にHさんとのことを相談するのは不可能でした。それでもこの辛い胸の内を誰かに話したい、とすがったのがSNSのmixiでした。

そこにはレズビアンの人が集まるコミュニティがあり、友人を募集できるスレッドがあり

ました。

ネット上にはどんな人がいるか分からないし、男の人がレズビアンに成りすまして書き込んでいるかもしれない、犯罪に巻き込まれるかもしれない、と思いながらも藁にもすがる思いで、自分の現状と、相談に乗ってほしい旨を書き込みました。活発に動いているスレッドだったので、数日の間に 4-5 人の方からメッセージが来ました。

何度かメッセージのやり取りを重ねた後、同い年で、住んでいるところも近い人と実際に会ってみることにりましたが、ネット上の人と実際に会うのはやはり怖いので、お昼間に人がたくさんいる繁華街で会うことにしました。それが現在のパートナーの淳子さんです。

誰にも話せず溜まりに溜まったしんどい恋愛話を聞いてもらい、何度か一緒に遊びに行ったりしました。

結局 H さんには交際 3 か月であっさりと振られ、その時がちょうど淳子さん自身の恋愛も終わったタイミングだったので、「傷の舐めあい会」と称して二人でレズビアンバーに行きました。そこのママさんに「私たち二人とも振られたんですが、だれか良い人がいたら紹介してくれませんか」と伝えたところ、「あんたたち二人が付き合えば良いじゃない」と言われ、それまで全く意識していなかった淳子さんのことを意識しました。

それからしばらくして、淳子さんに「付き合ってください」と言われ、「私でよければ…」と OK して付き合うことになりました、

ほどなくして一緒に暮らすようになり、大学の同級生と一緒に開業した動物病院の仕事を手伝ってもらうようになりました。

はじめは日に数時間のお手伝いだけでしたが、動物看護師の資格を取ってもらって、公私ともにパートナーとなりました。

淳子さんと付き合いだしてからは勇気が出ずに行けなかったレズビアンバーやレズビアンのためのクラブイベント、友達作りのオフ会などに 2 人で行き、たくさんのレズビアンの友人ができました。

世間には実は自分と同じように同性が好きな人がこんなにたくさんいるのだ、と驚きつつものすごく嬉しく思ったことを今でも鮮明に覚えています。

【公での結婚式】

淳子さんと付き合い始める前も、付き合ってから異性カップルの友人の結婚式には何度も出席しましたが、いつも「すごく幸せそう。私にもパートナーがいるけれど、こんな風に周囲から祝福されることは一生無いのだろうな。」と思っていました。

SNS 上で女性同士のカップルさんがフォトウエディングをしたという投稿は見たことはありましたが、その場に居たのは写真を撮る当事者のお二人と業者さんだけでお祝いしてくれる出席者はおらず、ウェディングをしたお二人の顔も明かされていませんでした。それでも当時は二人がドレスを着てフォトウエディングをするというだけで画期的でしたが、「同性カップルでできるのはここまでが限界なのかな…。それだったら自分たちは高いお金を出してまでやりたくはないな。」とっていました。

付き合ってから三年が経って二人の物が増え一緒に住んでいたワンルームマンションが手狭になったのと、気兼ねなく動物たちと暮らしたいという思いがあり、思い切って職場近くの中古の一軒家を買うことにしました。

法律的には赤の他人であるため、共有名義で住宅ローンを組むことはできず、私一人の名義で購入しました。

この頃から、「このままずっと淳子さんと二人で暮らしていくんだろうな。」とっていました。結婚という単語が頭に浮かんでくることはありませんでした。

悲しいことに私にとって結婚は「当然できないもの」「考えても仕方のないこと」として完全に頭から排除してしまっていたのです。

そんな中、2014 年に大阪市の扇町公園で開催された関西レインボーフェスタという性の多様性を祝うお祭りで、ゲイのカップルさんがステージ上で公開結婚式を挙げているところを見ました。

お二人は少し照れ臭そうではありましたが、とても晴れやかな笑顔で、たくさんの来場者に盛大に拍手をされ、「おめでとう！」と声をかけてもらっていました。

私も精いっぱい大きく手を叩き、「おめでとうございます、いつまでもお幸せに！」と声を張り上げました。

「同性同士のカップルでもこんなに祝福してもらうことができるんだ…。」と感極まって涙があふれてきました。

顔を出して公の場に出たお二人の勇気に感動し、今までなんとなく感じていた背徳感が少し薄れたような気がしました。

そして翌 2015 年、「関西レインボーフェスタのステージで結婚式を挙げてみないか」とお誘いを受けました。

「あの感動的なステージに自分たちも立たせてもらえるのか」と心が躍りましたが、それ

は同時に不特定多数の人にカミングアウトをすることになるため、二つ返事で OK することはできませんでした。

しかし昨年結婚式を挙げたゲイカップルさんを見て「自分たちもできることならあんな風に祝福をしてもらいたい」と思ったこと、そして「周りに同性愛者なんていないと思っていたかつての自分のような人がまだたくさんいるだろうから、当事者にも、当事者でない人にも、同性愛者は身近に居るんだよ、ということを知ってもらうために公の場で結婚式を挙げることは大きな意義のあることではないか」という考えに思い至りました。

幸いなことに私の母はカミングアウトをすんなりと受け入れてくれました。

父は私が二十歳の時に亡くなっていますが、「もしも父が生きていたらなんて言っただろうか…同性との結婚を反対した？それとも喜んでくれた？」と思いを巡らせることはあります

公開結婚式を挙げることの一番のネックは仕事でした。

もし「あの動物病院の獣医はレズらしいで」と噂が立ったら、「そんな人に診てもらうのは気持ち悪い」と言って来院してくれる人が減るのではないかと、下手したら病院がつぶれてしまうのではないかと。

そんな不安と一緒に開業している友人に相談したところ、「そんなことを言う飼い主さんは来てくれなくてもいいから、結婚式を挙げたらいい」と言ってくれました。動物病院の経営にとってデメリットがあったとしてもメリットはないのにそこまで力強く言ってくることが本当に嬉しくて、最終的にこれが後押しとなり公開結婚式を挙げる決意をしました。

結婚式挙げることを知らせるために、学生時代の友人や恩師、前職場の同僚・上司など会える人全てにカミングアウトしました。後から人づてに知られるよりもこちらから伝えた方が良さだろうと思い、SNS でつながっている知人にも全て知らせました。

結婚式は牧師の先生の司式のもとで行われる人前式で、遠方からも友人が駆けつけてくれ、会場の公園に集まった何百人もの人に祝福の拍手と声援をもらうことができました。これ以上幸福なことはないと思えるほど幸せな瞬間で、当初はなぜ結婚式を挙げることを迷っていたのだろうと思うくらいでした。

結婚式を挙げた後、もしかするとそれを知って何も言わずに来院されなくなった飼い主さんがいるかもしれませんが、直接的に誹謗中傷を受けることはなく、明らかにそのせいで

来院数が減ったということはありませんでした。

【パートナーシップ】

2015年に東京の渋谷区で始まったパートナーシップ証明書のニュースを羨ましく見ていた私たちは、2018年に大阪市内でパートナーシップ宣誓証明制度が始まった時、喜び勇んで制度開始初日に利用しました。

2人はコソコソとしないといけないような関係ではない、と大阪市内に認めてもらえた気がして、とても嬉しく晴れ晴れとした気持ちになりました。

法的拘束力はないものの、公立病院に限ってはありますが二人を必ず家族としてみなしてくれるということは一定の安心感につながりました。

《淳子の場合》

【幼少期から思春期】

小学校の頃は外で走り回ってばかりいて、父からじゃじゃ馬娘と言われていた私ですが、中学校の頃には大人しくて引っ込み思案な子になっていました。

そのため中学では静かな学生生活を送っていましたが、中1の頃には同じクラスに気になる女の子がいました。誰にでも優しい子で、私にも優しくしてくれ、気づけば自然とその子に目が行っていましたが、人見知りだった私は話しかけることもできないまま中学校生活は終わってしまいました。

【男性との交際・結婚】

高校に入ると周りの友達みんな彼氏を作っていたので、「そういうものなのかな」と思い告白してくれた男子と付き合いました。

その彼とは付き合っていて楽しくないことはないし、とりたてて嫌なことがあるわけではないけれどなにかしっくりこない、という感覚があり、交際は自然消滅という形で終わりました。

その後も何人か告白してきてくれた男子とお付き合いしましたが、男子と付き合いながらも常に気になる女の子がいました。

私はやっぱり人見知りのままで、あんまり話したことはないけれど、どうしてもその女の子のことを目で追ってしまう…。

「これはいったいどういう感情なのだろう？」と思いましたが、自分の周りには同性のことが気になったりする人は（もしかしたらいたかもしれないけれど）いないと思っていたので、「こんな感情を抱く自分はおかしいのだ」と思い、誰にも言えず自分一人の心の中で押し殺すようにしていました。

今思えば、男性と付き合ったのは男性と『恋愛』をしていれば友だちとの話の輪のなかに入っていけるから、周りと同じようにして合わせていただけだったのかなと思います。

高校卒業後は、友人に誘われて一緒にガードマンの仕事に就きました。
そして偶然町で出会った高校の同級生に「昔から好きだった」と言われ、付き合うことになり、そのままとんとん拍子で話が進んで結婚することになりました。
断る理由もないかと 21 歳の時に結婚し、退職。
夫と二人で楽しい生活を送るはずだったのですが、夫に浮気をされ、結婚生活は 5 年で終止符を打つことになりました。

【転機となった気づき】

私が中学～高校生だった当時は同性愛に関する情報が全く入ってきませんでした。
20 代に入るところにはインターネットが普及してきていました。
離婚後、何気なく SNS を見ていたら偶然同性愛者のコミュニティに出会いました。
「20 代の同性愛者」というコミュニティの中で、自分のように同性を好きになる人がたくさんいることを知ってすぐに自分と結びつき、一瞬にして自分もそうなのだと直感しました。

すぐさまそのコミュニティに参加し、開催されていたオフ会に実際に行ってレズビアン
の友人がたくさんできました。
引っ込み思案だった自分には考えられない行動力です。

レズビアンの友人と話していると素直に自分の思ったままの気持ちを出せる。今までずっと押しつぶし押し殺していた自分が解放されたような気持ちになりました。

そのコミュニティの中で知り合った女の子と恋仲に発展することもあり、初めての彼女と手をつないだ瞬間は、ドキドキと心が弾み、体が宙に浮きあがりそうでした。
これは男性と付き合った時には全く無かった感覚で、「やはり私は女性が好きなのだ」とコミュニティを見つけた時の直感が正しかったことを確信しました。

大阪と北海道間の遠距離恋愛も経験しました。

その彼女には二股をかけられるなどしてあまり良い別れ方をしませんでした。飛行機に乗って数か月に一度はるばる北海道まで会いに行っていたのも今ではいい思い出です。

【葛藤、そしてパートナーとの出会い】

しかし、念願だったとも言える女の子とのお付き合いですが、「これで完全に人には言えないことになってしまった。特に親におかしいと思われるのは絶対に嫌だから言えない。」と思いました。

自分自身に、女性同士の恋愛は普通ではないという意識が強くありました。

ネット上のコミュニティで出会った人から聞くまで同性同士の恋愛の話を聞いたことがなかったこと、幼少のころからテレビ等から入ってくるネガティブな情報などによって、知らず知らずのうちに同性愛は普通ではないから隠しておかなければいけないことだという認識が形成されていってしまっていたのです。

けれど自分が女性を好きなのはもう間違いないし、好きな女性と一緒に過ごす時間は何事にも代え難いくらいに楽しい。

この事実をどうしたらいいのか、と葛藤することはありました。

北海道に移り住むことまで真剣に考えていた遠距離恋愛の女性と破局し、その次に付き合った女性との交際も長続きせず終わってしまって、私は恋愛をすることに少し疲れてしまっていました。

そんな 31 歳の時に今のパートナーと SNS 友人募集の掲示板で出会いました。その時の第一印象は真面目で素直で浮気しなさそう、でした。

付き合うことになった時には「これが最後の恋愛かな…、これでダメならもうずっと一人で暮らしていこう」と思っていました。

そのパートナーとも今年で交際 10 年目。まさか結婚式まで挙げて親にカミングアウトすることになるとは、昔の自分に言ってもきっと信じないに違いありません。

もし、同性愛が悪い事だという刷り込み・思い込みがなかったら人生を遠回りすることもなかった。

もし、あのまま同性愛のコミュニティに出会ってなかったら、離婚した後一人で引きこもって死ぬまで孤独な日々を過ごしていたかもしれません。

同性愛がいけないことだという認識を自分がいつの間にか持っていたことが怖いです。

同性愛者本人がそう思うくらいだから、異性愛者の人はもっと思っているのではないかな。

たまたま私の友人や両親はみんな受け入れてくれましたが、それは本当に運が良かったのだと思います。

3.同性婚に対する思い

私たちはカミングアウトする素晴らしい機会をもらい、本当に運よく周りの人たちに受け入れてもらいました。

今現在は仕事をし、休日には友人と遊んだり、たまに二人で旅行に行ったりと、二人が健康で元気なうちは同性カップルだからといって日常で困ることはほとんどありません。

せっかくいただいたパートナーシップ宣誓書受領証は、同性カップルも OK な保険会社の自動車保険加入の際に受領証を提示しようとしたのですがそれでは認めてもらえず、残念ながら日常生活で使用できたことはまだありません。

将来的にはパートナーを家族とみなしてくれない私立の病院にお世話になることになった場合はどうなるのか、ひとみが先に死んだ場合、ひとみ一人の名義で購入した自宅の相続はどうなるのか、公正証書を残したとしても法的な配偶者よりも高額になってしまう相続税は払えるのか、というような不安があります。

今強く思うのは、何より、二人の関係を自治体に認めてもらえたというあの安心感を、国という単位ですべての同性カップルに与えてほしいということです。

結婚という選択肢が無いせいで別れたレズビアンカップルをたくさん見てきました。

同性同士のパートナーシップは、本当の家族になれない、ずっと一緒に居るという決意・覚悟が示してもらえないという不安から、ややもすると不安定な関係になりがちです。

世間にカミングアウトできない、二人の関係を公表できないままずっと二人だけで生きていくということへの将来の不安から別れる場合もありますが、親から勘当すると言われて泣く泣く別れざるを得なかったケースをたくさん聞きます。女の子と一緒に住んでいることが親にばれてどういう関係なのか問いただされ、地元に戻って男性とお見合いをするか親と縁を切るか選ぶように言われて断腸の思いで彼女と別れ地元に戻った友人、同性パートナーと子供を産み育てることを許してもらえず、世間体のために形の上でだけ男性と結婚した友人、そして親に受け入れてもらえなかったことが原因で精神を病み、自死を選んだ友人もいます。

親が同性愛者の子供を受け入れられないパターンは

- ・異性愛以外は理解ができず、生理的に無理と感じてしまう。
- ・世間体を気にしている。(結局自分のことしか考えていない。)
- ・同性愛者は生き辛いから、と子供のことを本気で心配して矯正しようとする。

などがあるかと思いますが、親が思っている生き辛さは、偏見がなくなれば解消されるはずです。

国が同性婚を認めてくれれば、偏見を持つ人に対しても「国が良いと言っているのに何がだめなのか？」と反論することができます。

もちろん理解できない、受け入れられない、どうしても無理だと思ってしまうのは仕方ないことだと思いますが、思うのと、口に出すこと・行動に移すことは全く違うことです。

私たちはパートナーと出会うことができても今でも幸せですが、戸籍上でも本当の家族になれば、同性愛はおかしなことではないと国から認めてもらえたら、どんなに嬉しいだろうか。心からそう思います。

日本に住んでいて良かったと思いたい。

毎日嘘をついて、隠れて、しんどい思いをして生きている同性愛者の人たちに安心して暮らせる環境を整えるため、少しでも早く同性婚を認めてほしいです。

以上